

称号及び氏名	博士（人間科学）	杉本 和子
学位授与の日付	2023年3月31日	
論文名	戦後日本映画に映る「女教師」——『青い山脈』から日活ロマンポル ノまで	
論文審査委員	主査	酒井 隆史
	副査	相田 洋明
	副査	東 優子
	副査	内藤 葉子

## 論文要旨

本研究では、戦後日本映画に登場する「女教師」表象を対象とし、戦後日本社会における建前上のジェンダー平等意識や表現の自由に代表される「民主的なもの」と「女教師」への眼差しとの乖離を、ジェンダーとセクシュアリティとの視座から分析した。それをふまえ、日本映画における「女教師」表象が、1949年の戦後復興期から高度成長経済期を経て、1988年のバブル期に至る日本戦後史と連動することで変容し、いかなる役割を担ってきたのかということ明らかにした。そして、その背後に潜む戦後日本社会の複層的な権力構造について考察を深めた。

第1章では現在では公的な場からはジェンダー・バイアスを表現する言葉として排除されたはずの「女教師」という用語や概念が、今なお残存する事実に着目し、その語彙、歴史的経過、セクシュアリティの対象としての商品化の現状を把握した。そこから、戦後日本映画に数多く登場する「女教師」表象をジェンダーやセクシュアリティの視点から分析するという研究手法によって、その背後に潜む戦後日本社会の複層的な権力構造の内在を捉えうる可能性を見出した。

第2章では男女平等理念による恋愛や結婚などのテーマを提示した映画『青い山脈』5作における1949年から1988年までのアダプテーションの過程での「女教師」表象の変化を分析した。「女教師」は1949年には男性並みの権利やプライドを持つ「名誉男性」、1957年には結婚による威信の上昇に成功した「身持ちの堅い」お嬢様、1963年にはロマンチック・ラブ・イデオロギーにより自ら性的役割を選び男性や若者を支えるサポーター、1975年には「処女という性規範から解放された自由な女性」、1988年には自らの負の性体験すら生徒理解のストラテジーとできる感情労働者として表象されていた。それは女

性観客にそれぞれの時代の半歩先を行くロールモデルとしての価値を提示していた。しかし、そのような「女教師」表象は現状との軋轢や自己との葛藤が生じない口当たりの良い「民主的なるもの」としての加工がなされていたので、かえって背景に存在するジェンダー非対称性を隠蔽する役割をもたらしした。そのため、女性観客自身が「男性の作った理想の女性像」を内面化し、ジェンダー役割の再生産を担うエージェントとなることにあこがれるという効果を生んだ。しかも、そこにはそれを自ら主体的に選んだと錯覚させる力がひそんでいた。

第3章では記号学の「神話作用」という視座から1954年の映画『女の園』を分析した。カメラワークと衣装への着目から「女教師」表象に潜む二重構造が明らかになった。そこには、製作者たちが興行戦略的意図で提示した「女性の自由と人権の拡張」という「民主的」メッセージの背後に、女性嫌悪や異性愛規範に根差す女性の分断と「母性」讚美という家父長制を支えるイデオロギーが存在していた。また、原作の小説における進歩的政治性やドイツ映画『制服の処女』のような革新的映画の映像表現のテクニックを模倣しながらも、小説における複眼的構成を一元化し、『制服の処女』における女性の連帯や同性愛による解放の物語を異性愛規範に引き戻すという操作もなされていた。つまりこの映画に存在する「女教師」イメージの二重構造は、戦後日本の民主主義における建前と本音の二重構造を象徴するものであった。

第4章では1966年の映画『白昼の通り魔』における「女教師」の「強姦」表象を「民主的なるもの」の「陰画」としてとらえ、大島渚に代表される1970年前後の新左翼的ムードと戦後民主主義との複層的関係をジェンダーとセクシュアリティの観点から読み解いた。加害者に焦点を当てた従来の記号論的な意味づけを超え、被害者に焦点を当てて性暴力表象としての概念をとらえなおすことをめざした。まずこの映画の「強姦」表象以外のシーンにも通底するジェンダー非対称な権力の構造の分析をおこなった。次に、強姦に関わるシーンにおける斬新で高度な映画技法を分析し、それが記号論的な意味づけによる解釈を促していることを読み取った。そしてそれらの作業によって、その背後でひそかに近代の家父長制におけるジェンダー・ヒエラルキーが大きく作用していることが明らかになった。「女教師」を欺瞞的な戦後民主主義のエージェントにたとえ、それを「強姦」する表象に政治的なメタファを重ねて革命的だとする解釈は、この映画全体の表象に潜むジェンダー非対称な権力関係を隠蔽し、批判をかわす隠れ蓑としても作用する役割を果たしていた。「民主的なるもの」の欺瞞を暴いた「革命的」な映画は、皮肉にも背後に存在するより強固なセクシズムやミソジニーを「民主的なるもの」の批判と「強姦」の記号論的解釈によって覆い隠していたのである。

第5章では1972年から1986年までの日活ロマンポルノの「女教師」シリーズ21作における「女教師」表象を分析し、製作者と男性観客の共犯関係にもとづいた「強姦神話」の生成を歴史的に検討した。「女教師」が日常生活では簡単に性行為のパートナーとなる存在ではなく、むしろその対象とすることを道徳的に禁じられている存在であるからこそ

「女教師」表象は、これらのポルノグラフィにおいてこのタブーを破り妄想を掻き立てる素材としての存在意義を発揮した。1970年代ロマンポルノの「女教師」が指導的な立場で、若い男生徒を性的に導くという表象は男性観客に「母性」への甘えに浸っていた少年時代への郷愁をそそり、資本主義的家父長制でのジェンダー・ヒエラルキーの逆転に対する不安やコンプレックスを性的妄想の中で解消する役割も果たした。1980年代以降ロマンポルノにおける「強姦神話」はさらにエスカレートしていった。その背景には1995年に男女雇用機会均等法が成立し、「女性の時代」ともてはやされていた社会の潮流へのバックラッシュがあった。それらは新自由主義経済やグローバリゼーションの進行により、ジェンダーやセクシュアリティなどの概念すら商品化されていく戦略の中で生じた複層的な権力関係に起因している。

終章では本論文全体を通しての考察から得られた結論と今後の課題を提示した。戦後日本映画における「女教師」表象は、「民主的なもの」「革新的なもの」「表現の自由」などの価値観を重んじているように装いながら、実はジェンダー非対称な権力構造、強固なセクシズムやミソジニーを基盤として歩んできたという戦後日本社会の二重構造を象徴するものであった。バブル期以降には、日本映画における「女教師」表象は建前としての民主主義的な価値を装う力さえ失い、ついに「強姦神話」の担い手にまで転落していく。このような二重構造は、日本社会における抑圧や差別、不条理に対峙し闘うという感性を鈍化させるための巧妙なテクニックでもある。その後本格的に新自由主義経済が展開していく中で、企業はこのテクニックを巧妙に取り入れ、「平等」や「多様性」に関する価値は映画における表象以外にもさまざまな分野で販売促進のための戦略のツールとされていくことになる。戦後日本映画における「女教師」表象はその先駆けとしての役割を果たしていた。

戦後日本映画は「自分のものであるはずの傷や痛み、恥の情動や闘いの物語を（「女教師」という）他者の側に置き換え、別の誰かに代理させるという運動」（内藤 2021:71）をおこなうことで女性という他者への依存のシステムとつながってきたといえる。つまり、「前衛」や「革命」や「表現の自由」を標榜しながらも、戦後日本の男性映画監督たちは、「他者」としての「女教師」表象を利用し、「近代的主体が他者を否定的な鏡とすることで肯定的な自我を構築するという構造」（Said 1978）（Spivak 1988）に依存してきたのである。

今後の課題は、本研究の方法論の射程とその限界をふまえたうえで、2000年以降の日本映画における「女教師」表象についても分析し、現代の日本の状況へとつなげる研究をすすめていくことである。

初出一覧

序章

(書き下ろし)

第1章「女教師」とは何か

大阪府立大学人間社会学研究科博士前期課程修士論文をもとに加筆

第2章「民主的なるもの」としての「女教師」

一映画『青い山脈』5作(1949年版、1957年版、1963年版、1975年版、1988年版)  
における表象分析から

(大阪府立大学人間社会学研究集録. 13 : 77-105)

第3章

「女教師」イメージの二重構造:木下恵介『女の園』(1954 松竹)の分析から

(女性学研究 Women's Studies Review. 24 : 90-115)

第4章

「民主的なるもの」の陰画としての「女教師」—大島渚『白昼の通り魔』(1966 松竹)  
の分析から

(日本映画学会第13回大会プロシーディングス : 5-17)をもとに加筆修正

第5章

「指南役」から「奴隷」へ—日活ロマンポルノ(1972-1986にっかつ)—

(第9回日本映画学会例会報告集 : 8-12「日活ロマンポルノに映る〈女教師〉—田中  
登〈女教師〉シリーズ3作の分析より」)をもとに加筆修正

終章

(書き下ろし)

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

審査委員会 第1回 2023年2月14日(火) 11時30分 -12時00分

第2回 2023年2月22日(水) 15時00分 -16時00分

第3回 2023年2月24日(金) 10時00分 -11時00分

1) 研究テーマが絞りこまれている。

本論文は、戦後日本映画における「女教師」表象をとりあげ、作品が前提としている性差の平等や表現の自由といった「民主的なもの」のテーマ系とそこで表象されている「女教師」への家父長制的まなざしとの乖離を、ジェンダー／セクシュアリティの視座から分析し、その作業を通して、戦後日本社会の支配構造の一樣相を浮き彫りにする試みである。本論文の展開は、以下ようになる。1) 戦後日本における性差をめぐる支配、家父長制的ヒエラルキーのありようを映画表象とその変遷によって検討するといった大きな課題が設定され、2) 焦点を「女教師」に絞り込む。3) さらに『青い山脈』を起点として戦後民主主義のポジティブなイメージを託されてきた「女教師」の表象が、時代の変遷のなかで、その都度、戦後民主主義の明暗の葛藤の表現される場として変容する、そのありようが分析される。4) その分析を通して、民主主義や解放といったイメージをつらぬいて行使された女性をめぐる政治があきらかにされる。このような展開からあきらかなように、本論文の意図は一貫しており、設定した目的に沿った適切なテーマのもとに展開されている。以上から、研究テーマは十分に絞り込まれている。

2) 論文の方法論が明確である。

本論文は、映画史研究、ジェンダー／セクシュアリティ的映像研究の蓄積をふまえた映像分析を主軸におき、その分析を社会史的・社会学的知見によって文脈化するといった方法をとっている。つまり、映像研究としては、映像テキストの視覚的表象を内在的に読み解いていくショット分析を採用し、そこに理論的には記号論的アプローチから接近する。そして、そのようにして内在的に読み解いた意味を、映像テキストの外の社会的文脈とつきあわせながら、さらに深めていく。こうした方法である。したがって、方法論は明確である。

3) 研究テーマについての先行研究調査を十分におこなっている。

戦後日本映画における「女教師」表象の研究という直接の先行研究のない領域にあって、いっぽうでは日本の近代における女性教師にかんする社会科学研究を丹念に追尾し、そ

していっぽうでは日本内外の映画研究の蓄積と現代における展開にも注意深く目を配っている。以上のように、先行研究調査については十分である。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

基本文献については、複数の領域にまたがる理論的研究、実証的研究、さらには映画制作にかかわる当事者たちの書き残した記録、証言、あるいは時代時代の批評文などにいたるまで、広範囲にわたって渉猟し、検討を怠っていない。また、本研究は映画史的研究でもあるため、映像資料が重要な比重を占めるが、これについても素材にあげた映画作品を詳細に検討し、個別作品を構成する重要イメージの出現頻度などのデータを作成し、そのうえで説得力のある分析をおこなっている。さらに戦後にいくどもリメイクされた『青い山脈』の、とりわけこれまでアクセス困難であった稀少なヴァージョン（第2作と第4作）も掘り起こすといった努力をおこない、『青い山脈』の先行研究にはみられない詳細な比較検証をおこなっている。したがって、研究の素材となる基本文献、資料、調査データの吟味については、申し分ない。

5) 研究テーマについて、先行研究にはないあたらしい知見を打ち出している。

本論文の提示したあたらしい知見については、以下のようにまとめられる。1) テーマ設定の斬新さ。ジェンダー／セクシュアリティ映像分析という近年とりわけ活性化をみせている領域にあって、「女教師」を焦点化し、さらにはそのイメージを通して戦後映画史を再構築するという試みは、はじめてのものであるとあってよい。2) ジャンル横断的で、独特の視点からの系譜作成の試み。本論文は、「健全な青春映画」である『青い山脈』、ヒューマニズム的メロドラマ『女の園』、前衛的政治映画『白昼の通り魔』、ポルノグラフィである日活ロマンポルノ「女教師」シリーズといった、しばしば遠いと考えられている諸ジャンルを「女教師」というテーマによって大胆に横断して、かつてない発見を複数おこなっている。3) 『青い山脈』研究への貢献。すべての『青い山脈』のリメイクを対象にそれぞれを詳細に分析したという点で前例がない。4) 『女の園』研究への貢献。『女の園』における複数の登場人物を対象とするショットの質とその時間の計量的分析から意味作用の操作を発見することで、通常の解釈とは異なる斬新な視点からの『女の園』像を提示している。5) 大島渚研究への貢献。先行世代との切断が強調されがちであった大島渚監督における作品の先行世代との連続性が映像分析を通して確認され、その切断の質にあたらしい照明を当てた。また大島渚における「レイプ」表象の意味が詳細なショット分析からあきらかにされた。6) 日活ロマンポルノ研究への貢献。近年活発化している1970年代日活ロマンポルノ研究に、量産された日活ロマンポルノの作品群のうちにつらぬく女教師イメージとその変容というあたらしい知見をつけくわえた。以上のように、野心的な目標の設定に十分に見合う成果が多数、提示されていることはあきらかである。したがって、研究テーマについて、先行研究にはないあたらしい知見の提示という点でも、申し分ない。

6) その知見を裏づけるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文は、文献から映像テキストにいたる、広範な資料を渉猟し、そのうえで、映像テキストに対し、細部にわたる内在的なショット分析をおこなっている。記号論的・意味論的解釈も、ときに量的データの摘出と分析によって裏打ちされている。先行研究の整理という点でやや不満も残されたが、本論文には、総じて精力的な読解と緻密な論証にもとづいた議論の展開が確認でき、あたらしい知見は必要かつ十分に裏づけられている。

7) 当該分野の研究領域にあらたな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本論文は、フェミニスト映像分析という視点からも、戦後日本映画史という視点からも、また戦後日本社会のジェンダー論的分析という視点からも、ユニークであらたな知見を提示し、それらの各領域に、あたらしい展望を示唆するものである。以上の点で、本研究は、当該分野の研究領域にあらたな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

以上の評価をふまえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。